やはり俺がボーダー隊員なのはまちがっているようでまちがっていない。

スキート

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

３年半前、突如三門市に複数の門（ゲート）が開いた。

その門から出てきたのは、近界民（ネイバー）と呼ばれる怪物だった。

混乱する三門市。

彼らにあらゆる兵器は意味を成し得ず、誰もが世界の終わりだと思った。

その時、近界民を倒す術を持つ集団が現れる。名を「ボーダー」。

近界民を押しのけた後、すぐさま彼らは三門市に巨大な基地を作り、今でも、近界民との戦いを、続ける。

―これは、何もかも失った少年、比企谷八幡が、失ったものを、取り戻すために戦う物語である。

注意事項

・この小説は以前書いていた「やはり俺がボーダー隊員なのはまちがっていない。」のリメイクでも何でもありません。

・キャラ崩壊すると思います。

・駄文ですので、それでもいいよという方のみ見てください。ダメな方はブラウザバックを推奨します。

話を見直す為、全話削除しました。

今までの話を加筆修正して再投稿します。

目次

奉仕部入部編
第1話　比企谷八幡 ―― 1
第2話　比企谷隊 ―― 8

奉仕部入部編

第１話　比企谷八幡

３年半前のあの日、見るに耐えない地獄を見た。逃げ惑う人々、崩れた瓦礫（がれき）。そして、そこら中で、暴れまわる近界民（ネイバー）と呼ばれる化け物の大群。

その時、『ボーダー』に入っていた俺でさえ、吐き気を催（もよお）した。どこに行っても人の叫び声が俺の耳に鳴り響いた。目の前で死んでいく人々を何回も見た。手が届く距離にいるのに、助けられなかった命がいくつもあった。

そして、後に『第一次大規模侵攻』と呼ばれるこの戦いで、俺は大切なものを２つ失った。『ボーダー』であった母に、『ボーダー』ではなかった妹の小町が俺の前から消えたのだ。母は俺を庇って死んだ。小町は、俺が駆けつけた時にはもう姿を消していた。もう生きていることも定かではないが、小町に関しては行方不明扱いになっている。

――――――――あの時の戦いで、俺の手元には飼っていた猫であるカマクラと母親が死ぬ間際に残した黒（ブラック）トリガーだけが残った。

助けたかった。でも、救えなかった。

あの結果は全て俺の力不足で起こしてしまった結果だ。

だからこそ、俺は全てを失ったあの日に誓ったんだ。

もう何も、失わないと――――――――――――。

「⁉？」

俺はバッと体を起こす。

３年半前のあの日のことを、未だに夢に見る。忘れなれないくらい俺の記憶に深く切り刻まれたあの記憶を。

「…ど、どうしたの八幡。凄い汗よ？」

俺は自分の部屋から出て下の階に降りると、桐絵と遭遇する。どうやら先程の夢のせいで凄い量の汗をかいていた様だ。言われるまで気づかなかった。

「いや、別に何でもねぇよ」

心配する桐絵を余所（よそ）に、俺は素っ気なく言葉を返す。

「それならいいわ。ほら八幡もうご飯出来てるから直ぐにいくわよ」

ここは玉狛支部。ボーダー本部とは別に隊員が集まる支部である。この玉狛支部は少数精鋭といった具合で、人数は１０にも満たないが、実力は確かである。

そして今俺をリビングまで引っ張ってるのが小南桐絵。アホ毛がぴょんと立っていることが特徴で、素直な性格をしている。玉狛支部にある部隊、玉狛第一（木崎隊）の攻撃手（アタッカー）であり、攻撃手（アタッカー）としての実力はボーダー内でＮｏ．３を誇る実力派である。

リビングに入ると、ご飯の準備をしているレイジさんと、テーブルに座って話しているゆりさんとミカエルさん。そしてその横でカピバラと戯（たはむ）れている陽太郎の姿があっ

た。
「おはよう八幡」
「おはよう八幡くん」
「おはよう」
「はちまん！　おはようなのだ！」
「…おはようございます」
　上から木崎レイジさん、林藤ゆりさん、ミカエル・クローニンさん、林藤陽太郎。
　レイジさんは、玉狛第一の隊長にして、ボーダーに2人しかいない完璧万能（パーフェクトオールラウンダー）手である。毎日自己鍛錬に励んでおり、体も鍛えられていて料理もでき、面倒見もいい。生身でも完璧万能（パーフェクトオールラウンダー）手である。
　ゆりさんは、玉狛支部のオペレーターを務めていて、ポニーテールが印象的な感じの女性。いつも落ち着いているレイジさんを浮足立たせる力を持つ。
　ミカエルさんは、玉狛支部の技術者（エンジニア）でカナダ人設定の近界民（ネイバー）だ。
　陽太郎は、子供にして何故か玉狛支部にいる謎多き子供、いつも玉狛支部で飼っているカピバラの雷神丸に乗って行動している。
「ほんっと朝は元気ないわねー」
「ほっとけ。俺はいつもこんなんだろ」

「２人とも冷める前に早く食え」
「はい」「わかってるわよ」

…

―ボーダー本部・比企谷隊作戦室―

ここは、ボーダー本部にある俺が率いる隊の作戦室。こんな俺でも隊長をしており、B級16位に位置するチームである。勿論B級最下位であるのには理由があり、俺、いやチームでの活動を一切やっていない。約1年前、俺は交通事故にあって以来、ランク戦と呼ばれるものをしていない。勿論俺の怪我が治ってからはランク戦に復帰するつもりだったのだが、半年前くらいに比企谷隊で仲違い的な事が起きてしまい、気まずくなってしまった俺は、ボーダー隊員としての仕事もあまりしておらず、隊員とも最近はまったく顔を合わせていないのが現状である。

俺のせいで、隊のみんなにも迷惑をかけている。この作戦室自体来たのは久しぶりだ。

そろそろ決めなければならないかもしれない。―比企谷隊を解散すべきなのか、活動を再開するためにみんなを集めるのか。

一応、この隊にも思い入れはある。現ボーダー創設時からあるし、A級にも上がってがむしゃらにみんなで頑張った思い出もある。

作戦室にあるソファに1人で座りながら考えている時、作戦室の扉が開いた。

俺が視線をその先に向けると――――――

「あれ？　先輩。こんな所で何してるんですか？」

比企谷隊（うち）の狙撃手（スナイパー）で、俺の後輩、一色いろはがそこにいた。

第2話　比企谷隊

「あれ？　先輩。こんな所で何してるんですか？」

亜麻色の髪色をしたゆるふわビッチ系女子、一色いろはがそこにいた。

「……お前こそ」

「私は時々この部屋の掃除にくるんですよー。いつかまた使うかも知れないのに汚いのは嫌じゃないですか？」

成る程、だから1年近く大して使ってないこの部屋があまり汚れていないのか。これに関しては正直驚いた。

「…まぁ、そうだな」

「先輩も手伝ってくださいよー。今日はめぐり先輩来れないから大変なんですよー」

城廻めぐり。比企谷隊のオペレーターにして癒しキャラの代表格といっても過言ではない。

というか少し申し訳ないな。俺の知らない間に掃除をしてくれてたなんて。

「ほら、先輩もやってください」

一色に「早くしてくださいー」と言われ、俺は指示通りにテキパキと掃除を始める。

暫しの沈黙。半年前の仲違い以来、俺と隊員の付き合いが悪くなってからかれこれ３ヶ月くらい話していないので、どう話せばいいのかわからなくなってしまった。多分一色もそうなのだろう。

「……ね、先輩」

突如、一色が沈黙を破る。

「……何だ？」

「……もう、ランク戦やらないんですか？」

「……今の所はする気はない」

「この隊もＢ級最下位。先輩の個人総合だってずっとずっと上げて頑張ってたじゃないですか…」

「……そう、だな」

俺はついつい言葉に詰まる。

一色の瞳には涙が溜まり、今にもこぼれ落ちそうだった。

俺はそんな一色を黙って見ることしか出来なかった。……一色は隊として活動した

かったのだろう。あの時間か好きだったのだろう。

「……い、今まで頑張ってきたじゃないですか‼？　Ａ級にも上がったじゃないですか‼？　こんな所で辞めちゃうんですか‼？」

「……」

一色から涙がこぼれ、俺は頭の中で投げかける言葉を探すも何も口に出すことは出来なかった。

俺は最低だ。女の子１人泣かせるまで追い込んでいるなんて気がつかなかった。

「…確かに半年前、私たちが喧嘩をしちゃってこうなったのはわかってるんです。でも……別に私たちは先輩を責めたかった訳じゃないんですよ……！」

「……あの時の俺がバカだったのはわかってんだよ。今になってみたら俺のことを思ってのことだってのもわかってる」

「……先輩は、小町ちゃんを助けたいんですよね…？」

「……ああ。助けたいに決まってる」

俺の声は震えていた。

俺は今まで逃げていたのだ。小町を助けるつもりで今まで死に物狂いで力をつけてきた。もう何も失わないように、俺がこの手で守りきると決めた。半年前、俺は事故に会い、ボーダーの活動を暫く休んだ。

そして、その休んだ分を取り戻すために死に物狂いで働いて、入院してた時の勉強に追いつこうとして何度も徹夜をして頑張った。

けど、その結果体を壊し、隊員と仲違いを起こして、今までそれを見て見ぬ振りをしていた。

俺は、俺の手元には何もないのだと思っていた。

けれど、小町を失ってからも俺は大切な物を手にいれているのだろう。大規模侵攻後に入ってきた新しいボーダーの仲間。そして何より、俺をここまで支えてきてくれ比企谷隊の３人。だがそれにも俺は向き合わなかったのだ。

「…でも、俺の今の力じゃ助けられない‼？　俺１人の力じゃ、守りたいもの１つも守れない‼？」

…『守れない』じゃない、『守ろうとしていない』んだ。Ａ級のトップまで登りつめた俺は、きっと慢心していたのだろう。『今の俺なら何でも出来る』と。

「１人じゃないです‼？　先輩には色んな人たちが付いてます！　私たちだっています！」

「…一色」

「なんでもかんでも1人で背負わないでください‼？　私は先輩に憧れてボーダーに入ったんですよ‼？　情けない姿見せないでくださいよ‼？」

ここまで女の子に言わせて、男の俺が黙ってちゃカッコ悪いだろう。

……ああ。本当にカッコ悪い。カッコ悪すぎて自分でも反吐がでるくらいだ。

「……すまん一色。見苦しいとこ見せた」

俺は顔を上げた。俺は一色に『気づかせてもらった』。…いや、『気づいていたけど気づかないフリをしていた』のだ。

何もしなくてどうする。何もしなかったら小町は帰ってこない。やって後悔するのとやらないで後悔するのでは全くもって意味合いが違う。

「わかればいいんですよ。ぐすっ。ほんとめんどくさいですね」

一色はまだ溢れる涙を拭いながらそう言った。

「ああ。すまん。生憎そういう性分なんでな」

俺は涙が止まった一色を見据えて真面目な口調で話す。

「面倒かけたな一色。ありがとう」

俺はすぐさま玉狛支部に走り出す。何となくだが、今すぐやらないといけない気がした。

逃げるのはもうやめだ。

俺は半年前、選んだ選択肢を間違えたのだ。

間違えたことに気づかず、また間違った道を正しいと思い込み進んで行く。

そうやって人は、いつしか本当に戻れなくなるのだろう。

だが、間違いに気づければ話は違うのかも知れない。

進むしかないんだ。例えこの選択が間違っていたとしても、周りのみんなからしてみれば最適解ではない答えを選んだとしても。

きっと、間違え探しをしても見つからないのだ。

――――何故なら、俺が導き出したその答えを間違いなどとは思っていないのだから。

。。。

【ＩＳＳＩＫＩ　ＩＲＯＨＡ　ＳＩＤＥ】

「いろはちゃん。遅れてごめんね」

比企谷隊の隊室に、オペレーターであるめぐり先輩が入ってきた。

「あれ？　来れるようになったんですか？」

「うん。どうにかね。で、それより来る途中に比企谷くんが猛ダッシュでどっかいったんだけど、どうしたの？」

「…先輩が漸くやる気になったんです」

私がそう言うと、めぐり先輩は驚いたような表情を見せ、少し涙ぐむ。

「ほ、ほんとに？」

「はい！」

「よ、よかったぁ……」

きっと、めぐり先輩も私と同じ気持ちだったのだろう。それは、ここにはいない陽乃先輩も同じだろう。陽乃先輩もこの隊の隊員でＮｏ．４攻撃手（アタッカー）として有名だ。

「さっさと掃除しちゃいましょう！　めぐり先輩‼？」
「うん！　私たちがしっかりと支えないとね！」
　これが、比企谷隊再始動の大きな一歩になるだろう。そのためには、この部屋もさっさと掃除して、私も強くならなければ。

。。。

俺は早速玉狛支部に戻ってきた。それは、ある奴に稽古をつけてもらうため。
「桐絵、お前に頼みがある」
俺が稽古を付けて貰おうとしてる相手は、Ｎｏ．３攻撃手（アタッカー）である小南桐絵である。
「ど、どうしたのよ？　そんなに改まって」
「俺に稽古をつけて欲しい」
俺がそう言うと、桐絵の表情が少し曇る。
「……いろはちゃん達とは仲直りしたの？」
「うぐ……一色は大丈夫だが雪ノ下先輩と城廻先輩はまだ…」
「…今度会ったらすぐに謝りなさいよ」
「…おう」
少し気まずい空気が流れたが、桐絵がこっちをじっと見つめ仕切り直すような言葉を俺にかける。
「ま、いいわ！　あんたのその腐りきった根性、叩き直してくれるわ！」
「ああ。助かる」

―×―×―×―

「はぁ？　こんだけできてあんた半年のブランクがあったって訳⁉？」
「…はぁはぁ。そうだが」
結果は4―6。桐絵に勝ち越される結果となった。
「ふざけんじゃないわよ。何が私に「稽古つけてくれ」よ。こんなんなら忍田さんのところに行ってきなさいよ」
「…行くならお前に勝ってからだ」
「ふんっ！　生意気ね！　まぁいいわ。しっかりとその根性叩き直してボコボコにしてやるわ！　覚悟しなさい！」
「…お、お手柔らかに」
こうして俺の修行の日々が始まる。もう一度大切なものを取り戻すための長い長い日々が。